

Web ページ閲覧時の注目点の移動

小坂貴恵, 森田ひろみ

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科

はじめに

ユーザは多様な構造をもつ Web サイトから、自分の欲しい情報を速やかに見つけられているのだろうか。そこで本研究は、Web サイトの構成とユーザの注意の移動順の関係について調べた。

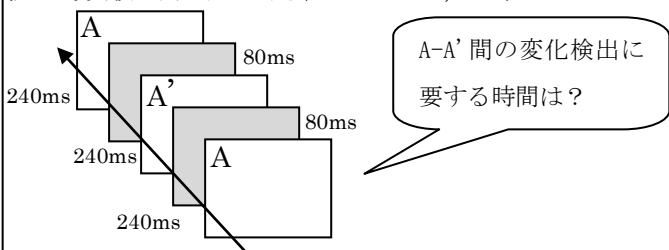
〈眼球運動測定からわかっていること〉

- ・ユーザは画像より文章を先に見る
- ・画面の右より左、下より上を先に見る

(大野, 2000; Stanford Poynter Project, 2000)

注意の測定手法「フリッカー法」

ユーザの注意をより直接的に測定するために、変化の見落とし現象を利用した。この現象を利用して注意を測定する、フリッカー法という実験パラダイムがある(Rensink et al., 1997)。



Rensink らによると、変化部分に注意を向けている時に画面が切り替わると、変化を発見することができる。したがって、早い時点で変化部分に注目していれば変化の発見は早く、変化部分に注目するのが遅ければその分変化の発見に時間を要する。つまり、実験開始から変化を発見するまでの変化検出反応時間が、観察者の注意移動の道筋に関係していると考えられる。

本実験で用いた刺激

A : 通常の Web サイトのトップページ

A' : A を一部変化させた画像

—変化部分: Web ページ構成要素に基づいた 5 か所

—変化タイプ: オブジェクトの消去もしくは色の变化

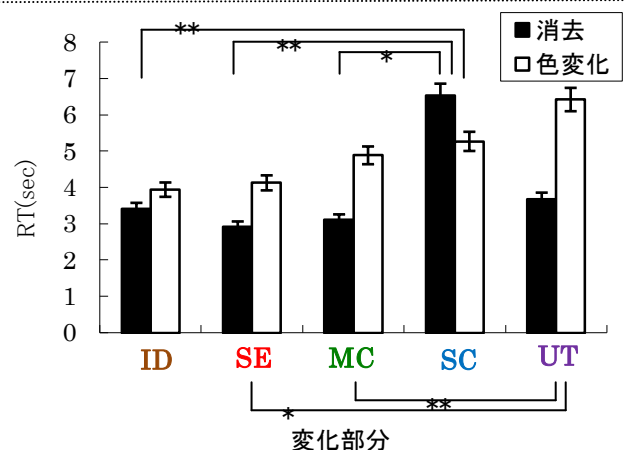
Web ページ構成要素

Web ページをその機能から、以下の図のように ID, SE, MC, SC, UT の 5 つに分類する (Krug, 中野恵美子訳 2001)。

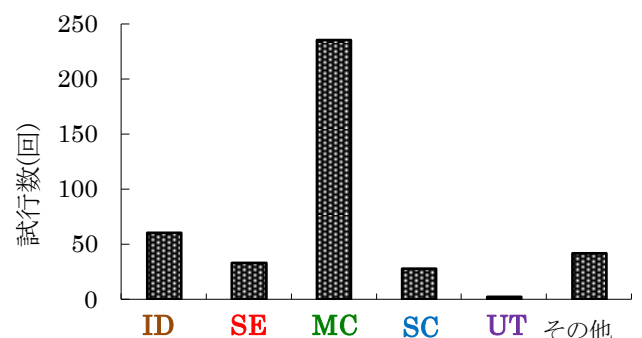


結果

変化検出反応時間はあらかじめ対数値に変換し、標準偏差の 3 倍を超えるはずれ値を除いた。すべての分析はデータの対数値に對して行ったものである。



変化部分と変化検出反応時間の関係



最初に注目した部分(アンケート結果)

変化検出反応時間(≒注意を向けた順)

(ID, SE) → (MC, UT) → SC

考察

この結果は右より左、下より上に先に目をむけるという Web サイトにおける情報探索の視線情報を調べた研究結果の傾向とも一致する。

また、変化検出が早かった SE に関しては画面の上部や左側に配置されることが多く、普段から何度も見たり使用したりするために、注意を向けやすいと考えられる。一方、変化検出反応時間が遅かった SC に関しては、画面の隅にあることが多い、普段から利用頻度が低い等の理由から注意を向けにくいと考えられる。以上を踏まえると、注目点の移動は画面上の位置と普段の Web 閲覧においてどこを頻繁に利用するかに関連しているといえる。

また、「実験開始直後にまず MC に注目した」と報告した実験参加者が多くいたにもかかわらず、実験結果からはまず ID と SE に注意が向いたということがわかった。つまり実際には、ユーザがまず実験結果通り ID と SE に注意を向け、次に内観報告通り MC に注意を向けたのではないかと考えられる。